

# 日本人ボランティアとの出会いと対話を基軸 とした授業活動の可能性についての考察

—— 早稲田オレゴン夏期日本語プログラムでの実践から ——

矢 部 まゆみ

キーワード

出会い, 対話, 社会文化的実践

## 0. はじめに

人と人が出会い、対話をしていくプロセスとはどのようなものであろうか。留学生がキャンパスで日本人の学生に出会い、お互いについて知り合い、交友関係を深めていこうとすると、そして自分たちの興味のあることや問題について話し合い、問題解決をしていこうとすると、どのような言語活動が必要とされるであろうか。また、そこで〈文化〉なるものはどのように捉えられ、それぞれの個人はそれにどのように対応していくのであろうか。本稿は、留学生が日本人ボランティアと出会い、お互いに自分のことを知り合って語り合っていくプロセスを教室の中に呼び込み、そこで対話を展開していく力を涵養することを目指して、筆者が早稲田オレゴン夏期日本語プログラム<sup>1)</sup>において担当した授業の中で設計・実施した

- 
- 1) 早稲田オレゴン夏期日本語プログラムは、7月上旬から8月中旬にかけての6週間、米国及び世界各地からの学生が早稲田大学の寮に滞在しながら、西早稲田キャンパスで日本語を学ぶプログラムである。99年以来、「イマージョン」のコンセプトのもと、ホームステイを含めたフィールドトリップ

教室活動について、その意義と可能性を分析・考察するものである。

## 1. 対話と社会文化的実践

ロシアの言語哲学者、ミハエル・バフチンは、「言語が生息するのは、言語を用いた対話的交流の場において他ならない。対話的交流こそ、言語の真の生活圏なのだ」(Bakhtin 1963/望月他訳 1995:370)と述べている。バフチンによれば、〈対話〉は話し手と聴き手の二つの〈声〉が会い、互いに活性化しあう〈交通〉の過程である。〈声〉とは、単なる音声的・聴覚的信号ではなく、話し手の「視点」あるいは「意識」とでもいべきもので、話をしている主体のパースペクティブ、概念的な地平、地図、世界観といったより広い問題ともかかわっているものである。そしてそれは、静的な実在ではなく、動的な過程として考えられている(Wertsch 1991/田島他訳 2004:74-75)。対話とは、すなわち「自分はどういう人間で、どんな状況にあって、何を目指し、何を必要とし、どんなことを考えているのか、どんなことを感じているのか」というリアリティに根ざして、だれか具体的な相手に問いかけたり応答したりし、相手(他者)の声に向き合い、そこから新たな意味付けを行っていくことであり、筆者自身、日本語教育は、このような対話力の涵養の場であるべきだと考えている(矢部 2005)。

バフチンはまた、「言語＝ことばの現実となっているのは、言語形態の抽象的体系でも、孤立した発話でも、その実現の精神生理学的行為でもなく、発話によって実現される言語的相互作用という社会的出来事である」(Bahtin 1929/桑野隆 訳(1989):145, 下線は筆者)とも述べている。

---

や、「バディ」と呼ばれる日本人学生を各留学生に割り当てて交流の機会を持たせる「バディ・システム」を取り入れ、接触体験を重視してきた(宮崎・西條・中山2000)。2003年度からはバディ・システムは廃止となったが、授業に参加してくれる日本人ボランティアとの接触をより一層重視し、積極的に促すようになった。

このような社会文化的言語観に立つて改めて日本語教育を眺め、西口（2003）は、「第二言語教育の実践（授業実践から教材作成・教材開発やカリキュラム・デザインなども含めて）においてわれわれは、このような点に十分に意を払ってきたでしょうか。教室にいる学習者同士、あるいは学習者と教師の間で行われる相互作用によって具体的な社会的出来事が構成されるようにというような観点で、われわれは授業計画や授業実施をしてきたでしょうか」と、問題提起をしている。そして、「教室で生きる生の人間の存在、および彼（女）らが紡ぎだす本当の言語的交通、そしてそうした出来事が構成していく教室集団の歴史（社会的出来事）と生まれゆくコミュニティとの共通言語」を丁寧に扱っていくことの重要性を訴えている（西口 2003：275-276）。

では、「社会的出来事を構成するような言語交通」を教室の中で生み出すにはどうしたらいいだろうか。夏期集中日本語プログラムで来日する留学生にとっての、必然性をもった社会的出来事として、キャンパスで日本人の学生に出会い、知り合い、互いの共通点をみつけながら関係を深めていくことや、関心を持っている問題について説明したり相手の意見を聴いたりして自分の考えを深め、問題を解決していくことなどが考えられる。そこで、そのプロセスを教室に呼び込むために、日本人のボランティアに授業に参加してもらっておこなう、次のような3つの対話活動を設計した。

#### (1) 共通点がし

【目的】 ボランティアとのアイスブレイキング。互いの大まかなバックグラウンドを知り合い、共通点・類似点をみつけ、自己開示しやすい関係性・状況をつくる。ボランティアと日本語で話すことに慣れる。

【タスクの内容】 留学生2～3名と、ボランティア1名で一つのグループを作り、お互いの自己紹介をしたり質問をし合ったりしながら、メンバーの共通点を探し、ワークシート（添付資料1）に記入していく。

## (2) 人生の3大事件を聴こう語ろう<sup>2)</sup>

〔目的〕それぞれにとっての重要な経験、意味があった経験に耳を傾け合い、語り合うことにより、相手についての理解、自分自身についての理解を深める。

〔タスクの内容〕留学生2～3名と、日本人ボランティア1名で一つのグループを作り、お互いの人生の3大事件について話し、質問し合い、ワークシートの表を完成させる。あとで、話をきいた感想、自分の体験を語って感じたこと、考えたことをワークシート（添付資料2）に記述する。

## (3) 自由インタビュープロジェクト

〔目的〕自分が興味・関心があること、知りたいこと、考えたいことについて問いを立て、他者に説明し、インタビューをしながら、考えを広げたり深めたりしていく力をつける。

〔タスクの内容〕早稲田の大学生に尋ねてみたいことを考えて質問のリストを作り、インタビューをおこない、相手からどのような答えが返って来たか、そこから自分はどのように考察したかを、ワークシートに記述する。プログラムの最後の「最終発表会」で発表を行う。

## 2. プログラム全体の構成と対話活動の位置付け

2004年度オレゴンプログラムでは、受講生は来日時のプレースメントテストにより、初級前期（レベル1）、初級中期（レベル2）、初級後期～中級（レベル3）、中上級（レベル4）の4レベルに分けられ、午前中はレベル別の授業、午後は週2コマのワークショップ（必修選択）を受講する

---

2) 矢部（2003）では、2002年度早稲田オレゴン夏期日本語プログラムでの「ワークショップ」クラスにおいて実施した、「人生の3大事件」を聴き、語り合う活動について分析・考察を行なった。ここでは、自分の生活や人生の体験を第二言語である日本語で物語る行為により、日本語コミュニティの中で自己の存在を示し、位置付け、意味付けていくことが観察された。

ようになっていた。各レベルクラスにおいて1名のコーディネーターを含む4～5名の教師がチームを組んで午前中のクラスを担当した。筆者がコーディネーターを務めたレベル3クラスでは、表1のように、3つのセクションに分けて時間割を構成し、4人の教師で分担した。

【表1】レベル3クラスの授業構成

セクション	内容	時間数(1コマ=90分)	担当教師数
文法	「げんきⅡ」19～23課, 「J-Bridge」	22コマ	2名
聴解	テレビドラマを使った聴解・表現練習	10コマ	1名
プロジェクトワーク等	プロジェクトワーク, フィールドトリップの事前準備・事後振り返り, 漢字, 読解	22コマ	1名

筆者自身は「プロジェクトワーク等」のセクションを担当し、ここに「ボランティアとの対話活動」として、「共通点さがし」「人生の3大事件」「自由インタビュープロジェクト」を核として組み入れた。並行して、フィールドトリップ（ホームステイ含む）の事前準備と事後の振り返りや、文法の授業に組み込み切れなかった漢字と読解も扱っていく必要もあったため、【表2】のようにスケジュールを編成した。

【表2】レベル3クラス「プロジェクトワーク等」のセクションのスケジュール  
(★印：ボランティアとの対話活動)

回数	日時	内容
第1回	7月12日	ガイダンス（クラスの活動内容・スケジュール・評価方法等の説明）
		自己紹介
第2回	7月13日	漢字、読解「大学生活」（→日本の大学生に聞いてみたいことをリストアップ）
		★共通点さがし
		（補足：早稲田の大学生に聞いてみたいこと）
第3回	7月19日	鎌倉フィールドトリップ

回数	日時	内容
第4回	7月26日	漢字、読解「手紙」(→ホームステイ後のホストファミリーへのお礼状を書く際の参考にする)
		鎌倉フィールドトリップの振り返り
		★人生の3大事件
		(自由インタビュープロジェクトの説明)
第5回	8月2日	漢字、読解「これはどんな顔？」
		★自由インタビュープロジェクト(第1回)
		掛川フィールドトリップ準備
第6回	8月5日	漢字テスト
		★自由インタビュープロジェクト(第2回)
		掛川フィールドトリップ(ホームステイ)前日ガイダンス(ホストファミリーの発表、日程説明、課題[レポート及びホストファミリーへの礼状]の説明)
第7回	8月10日	掛川ホームステイ振り返り(印象的だった出来事の報告、課題レポートのトピック報告、ホストファミリーへの礼状完成)
第8回	8月13日	掛川レポートのフィードバック
		最終発表のためのブレインストーミング・準備
第9回	8月17日	★最終発表 準備(ボランティアの助けを借りて、準備。時間を計りながら、プレゼンテーションの練習)
第10回	8月19日	★最終発表会(ボランティアに聴衆として参加してもらう。それぞれの発表について、留学生もボランティアもコメントシートを記入)
第11回	8月20日	フィードバックセッション(クラスコーディネーターとの個別面接による最終発表会の評価、コース全体での達成度の確認)

### 3. 活動の展開

3種類の対話活動は実際にどのように展開していったらうか。ここで、授業の音声記録、学生が記述したワークシート、感想シート、レポート、教師(筆者)の授業記録をデータとして、記述し、分析を試みたい。

#### 3.1. 「共通点さがし」

留学生2～3名と、日本人学生ボランティア1名の組み合わせで7つのグループができた。この中の一つ、日本人ボランティアのJ1と、留学生

のF 1, F 2から成るグループでの対話の様子を見てみよう。はじめに、J 1が、オーケストラ部での練習のためにバイオンを持参していたことから、音楽の話になり、3人ともクラシック音楽が好きという共通点が見つけられた。F 2がピアノを弾き、F 1がオーボエを吹くということで、いつからそれぞれの楽器を弾き始めたかなど、問いかけがはじまった。

J 1：オーボエは、いつから練習をはじめましたか。

F 1：じゅうさんさい。

J 1：13歳。中学校1年生ですね。日本でいうと中学生, junior high school of the first grade. (F 1：うん) 僕はオーケストラ部だったんですけど、……orchestra club に入っていました。

F 2：Violin?

J 1：そう、ヴァイオリンのパートで。最初にオーボエで音を出して、合わせるんですよ。ラの音。

F 1：ラロ?

J 1：ラの…ラ。ツェー、デー、エー…アーの音、アーの音をヴァイオリンが出して、音を合わせて、

F 2：tuning?

J 1：そう、チューニング。オーボエがチューニングのroleをします。役割をします。

J 1は、自分がオーケストラでバイオリンを弾くとき、オーボエ担当者にラの音を出してもらってチューニングをするという、F 1のオーボエとのつながりを示そうとしていたようである。J 1はまた、「共通点をさがす」という課題が達成できるようにと、ボランティアとしての任務を感じてくれてか、共通点を見つけるために、様々な質問をしてくれている。

J 1：そうですね…そっか、休みの日は何をしましたか。休みの日。日曜日とかは、何をしますか。

F 2：あー、時々、友達と旅行します、と、買い物します、と…

J 1：あ、買い物、好きですか。

F 2：はい、好きです。

J 1：へえ。(F 1に) どのようなことをしますか?

F 1 : アメリカで？

J 1 : アメリカでも日本でも。日本はまだ来たばかりかもしれないですけど。

F 1 : 私の祖母の家に行きます。

J 1 : 祖母は、えっと、おばあさんは、どこに住んでいますか。

F 1 : 藤沢です。

J 1 : ああ、神奈川県。東京都のとなりの県ですね。へえ、すごいですね。  
旅行が好きですか。旅行。旅行は好きですか。

F 1 : …

J 1 : じゃあ、買い物は好きですか。

F 1 : はい。

J 1 : じゃあ、共通点は、買い物が好き、ということにしましょう (笑)。

F 1 : クラスのあとで買い物をするのが好きです (笑)

J 1 : ああ、そうなんですね。

(F 1 と F 2, ワークシートに書き込み)

J 1 : 料理はしますか。料理は自分でしますか。

F 2 : はい、します。

J 1 : 上手ですか

F 2 : まあまあです。でも大好き。

J 1 : 大好き。へえ。(F 1 に) 料理はしますか。

F 1 : いえ、できません (笑い)。

J 1 : 自分で何か作ったことはありませんか。

F 1 : あー…

J 1 : あんまり？

F 1 : タマゴ (笑い)。

J 1 : 卵 (笑い) ? 卵？ 卵を…なんか・割ったりとか？ 卵を割る？ なんか、カパって (ジェスチャー)

F 1 : うーん…。卵を… (まぜるジェスチャー)

J 1 : まぜる？

F 1 : scramble…

J 1 : ああ, scrambled egg! ああ, scrambled egg はできますか (3 人で笑い)。できますよね。じゃあ…

F 2 : 共通点! (笑い)

J 1 : そう, 共通点…スクランブルド・エッグを作ります! 日本語では, 「スクランブルエッグ」って言うんですよ。そう, ス・ク・ラ・ン・ブ・ル (書きながら), エッグ。スクランブルエッグを作れます。

このあと、留学生の F 2 から、J 1 に「趣味は何ですか」と問いかけが



あり、読書と映画についての話が進む。どんなジャンルのものが好きか、どの作家のものが好きかなど、具体的な名前が出てくる。できるだけ数多く共通点を見つけるようにという教師の促しを受けて、F2がさらに、メンバーに旅行でどんな所に行ったかを尋ねはじめる。そこから、涼しいところが好きという話になり、さらに出身地はどんな所かということから、それぞれの出身地が海に近いという共通点が見つかる。最後に、面白い共通点を書き出すようにとの教師の指示を受けて、「スクランブルエッグが作れます」「出身地が海に近いです」が3人によって選ばれた。チームの名前を何にしようか、とJ1が言う、F1が「スクランブル」と答え、笑いが出て、決定した。

他のグループでの対話でも、まずはお互いの趣味・興味などを聴き合うことから始まり、「～が好き」といった共通点が多く取り上げられることが観察された。また、旅行などの経験を取り上げる傾向も見られた。そして、できるだけ数多く共通点を挙げる、面白い共通点を挙げることを課題として求められたことから、後のほうでは「手を洗うことができる」「おなががすいている」といった遊び心のあるものも出てきた。「共通点さがし」の活動後に留学生に「感想シート」に記述してもらった感想（日本語・英語併用）を分類すると表3のようになった。

まず、全体的な印象として、実際に問いかけ話しができたことが楽しかった、自分の質問からその周辺的なことにも話が発展していったのが楽しかったという情感を述べるものが多かった。緊張・不安があったというものもあるものの、ボランティアが自分の話に耳を傾け、興味をもってくれたことから、相手への好感が生まれ、もっと話したい、関係を深めたいという気持ちが生まれているようである。また、漠然と「日本の大学生」とだけ捉えていたイメージから個々の具体的な情報を得て、興味を深めた様子が見られる。「新しい人に会おうと興奮する」というコメントにもあるように、具体的な個人との出会いとその人への興味関心から、

【表3】「共通点さがし」の感想（＊数字は複数回答があった場合の回答数）

分類	感想の内容
全体的な印象 (情感的なもの)	色々なことが話せた／楽しかった／楽しい話をして笑った／簡単だった／緊張した／不安があった
ボランティアの人の印象	ボランティアがやさしかった(4)／ボランティアがおもしろかった(4)／ボランティアは新しいアメリカの友達を作りたがっている／ボランティアが自分（留学生）の経験を知りたがっていた（興味をもってくれた）／（ボランティアとの対話は）授業で一番好きなこと
興味・関心の共通性	興味をもっていることが共通していて面白かった／相手と自分の趣味が似ていて、対話を楽しかった／共通点が少なくて見つけるのが難しかった／お酒を飲まない人だったので、バーの話ができなくて残念だった
出会いから触発される興味	新しい人に会うと興奮する／もっとたくさん意見をきいてみたいと思った／もっと聞いて、もっと話して、日本の文化を知りたい(2)

もっと知りたい、もっと話したい、もっと意見を聞いてみたいという動機が高まっている。笑いも出て、打ち解けた雰囲気が生まれた。

### 3.2. 「人生の3大事件」

日本人ボランティアJ2と、留学生F3、F4のグループでの対話の展開を見てみよう。まずJ2が口火を切って、自分の事件の一つを「高校2年の時に家族とイギリスとフランスに行ったこと」と話し出した。

F3：そしてイギリスで何をした？

J2：イギリスで…

F3：観光？

J2：うん、私の親せきのお姉さんがロンドン大学に通っていたの。そのお姉さんの卒業式に参加させてもらいました。みんなガウンを着ていてかっこよかった。

F3：ああ。

J2：日本ではガウンを着ないから…カトリックの学校だけで…私たちはスーツしか着ないから。

F4：制服？

J2：それがすごくゴージャスだった。

F4：えーと、フランスに、何をした？

J 2 : 絵、絵画が好きなので、ルーブルの美術館に行って、すごく楽しかった。  
F 4 : 何の絵を見た？  
J 2 : 私は、有名なのだと、モナリザとか  
F 3 : 本当の？  
F 3 : 本当の絵を見た？  
J 2 : 本当の絵を見て  
F 3 : どう思った？  
J 2 : すごい  
F 4 : あ、すごい、  
J 2 : 人がたくさんいて、並ばないとなかなか見られなかったんだけど、その分  
すごいなと思った。  
F 3 : そして、なんじ …how do you say “how long”?  
F 4 : いつ  
F 3 : ああ、いつまで、あの旅行した？  
J 2 : ちょうど2週間、2週間。  
F 3 : またあの、イギリスとフランス、行きたい？  
J 2 : すごく行きたいし、イギリスは英語が通じるから、ぜひまた一人でもぜひ  
行って、何か、長い間過ごしてみたい。  
F 4 : ああそう。

このあと、J 2 はF 4 から、「他の人生の大事件は？」と尋ねられ、二  
つ目の大事件として、通っていたカトリックの高校でボランティア活動が  
盛んで、自分も児童館で子供と遊ぶボランティアをした話を続けた。これ  
を聞いてF 4 が、「はくもカトリックの高校に行った」と反応し、J 2 に  
家族の宗教は何かと質問し、父方の家族は仏教、母方の家族は神道ときき  
興味を示す。三つ目の三大事件は、コンビニでアルバイトをしていた時に  
強盗が入ってきたことが語られた。

J 2 : ええと、三つ目は、私の、今アルバイトをしています。私は。アルバイト  
をしていて。今、コンビニで。  
F 3 : コンビニ！  
F 4 : Oh! (書いている)  
J 2 : でも、一度、そのコンビニに、強盗が入ったの。  
F 3 : ゴウトウ？  
J 2 : 強盗。お金を取って行っちゃったの。どろぼう。

F 3 : ああ、そう！ あなたに？  
 F 4 : ああそう！ どろぼうは何した？  
 J 2 : どろぼうは私がレジを打っているときに来て、何か聞き取りづらい言葉を言っていて、で、私が目を離した時に、お金をレジからとってっちゃた。  
 F 4 : ああ、そうです。じゃあ、このどろぼうは、お金をぬ…できなかった？  
…wasn't able to steel? ぬり…  
 J 2 : お金をとってっちゃって。でもそのどろぼうは2週間あとにつかまっ  
 の。警察に。ちゃんと。つかまって、お金は戻って来た。  
 F 3 : ああ、そう。全部？  
 J 2 : 全部戻って来た（笑）。  
 F 3 : そう。  
 J 2 : それで、私はもっと気をつけて仕事をしなきゃって（F 3 : はい）、す  
 ぐ（F 3 : はい）思ったの（笑）。  
 F 3 : そして、部長は何を言いました？あなたに。  
 J 2 : あ、  
 F 3 : 部長  
 J 2 : 店長？  
 F 3 : 店長。  
 J 2 : お店の上の人？  
 F 3 : はいはい。  
 J 2 : はじめは、すごく注意。注意不足だよって、おこられた。（F 3 : あ。）け  
 ど、もう私が落ち込んだの。怒られたので、すごく落ち込んで、  
 F 3 : チコン？チコンの意味は？  
 J 2 : ううんとね…ううんと、落ち込む…  
 F 3 : チコム？  
 J 2 : おちこむ  
 F 3 : オチコム？  
 J 2 : ううんと…すごく、  
（F 4、辞書を調べる）  
 F 4 : ああ、そうです、落ち込む。  
 F 3 : 落ち込んだ？ 何を。  
 J 2 : 怒られたから。  
 F 3 : ああ。  
 J 2 : でも、その私を見て、店長は、どろぼうが悪いから、がんばって、って。

このエピソードは、F 3 にも F 4 にも大きなインパクトを与えたよう  
 だった。やりとりのペースがだんだんに上がり、質問も次々と出るように

なる。下線で示した発話部の「盗る（盗む）」「店長」など、はじめは適切なことばが見つからない中、試行錯誤をしてボランティアからの助けを得て、言葉を得ていたり、「強盗」「落ち込む」のようにボランティアがはじめにその語を発した時には意味がわからず、その意味を尋ねたり、辞書をひいたりして、文脈の中で意味を理解していく場面が数多く見られる。このように、ボランティアの口から出て耳にした言葉を、F 3やF 4も会話の中で使ったり、ワークシートの記述の中で使ったりして、「自分達のことば」として機能しはじめてくる。いわゆる「専有（appropriation）」がおこってくるのである。

J 2の強盗のエピソードの後、F 4が一つ目の大事件として大きな野球の試合を見に行った話をした。これに続いてF 3が待ちきれないかのようにメキシコ旅行の体験を語った。そしてさらにF 4が、F 3のメキシコの話と先に出たJ 2のボランティア活動の話に触発されたのか、自分もメキシコに行き、ボランティア団体の活動で家を建てた経験を話し始めた。

F 4：…うんと、7年前ぐらいに、ティワナに行った。メキシコのね。ええと、これに、家族からうちを建てました。I mean, いえを建てました。

J 2：メキシコに？

F 4：はい。メキシコにこの家を建てました。ええと、この家族は、お金がなかった。ほんと、この organaization, この, non-profit organaization, 日本語は何ですか？ Non-profit…この会社はお金をもらわない

J 2：ああ…慈善活動？ ボランティアみたいな。

F 4：ああそう。ボランティアの organaization. ええと、名前は、コラゾンだった。コラゾンの意味は心です。

J 2：ふーん

F 3：(笑っている)

F 4：ええと、私たちは、全部の日でこの家を建てました。この家は、ええと、すごくきれいだ。この家は、ベッドとストーブ、ベッドとレンジとトイレを建てました。はい。この家族から、ほんと、いいだった。

J 2：感謝されました？

F 3：何？

J 2：その家族の人から感謝されましたか。

F 4：感謝されました。はい。

J 2 : どのぐらいの大きさのお家？  
 F 4 : ん？  
 J 2 : どのぐらいの大きさの家を建てましたか？  
 F 4 : 大きい？  
 J 2 : 大きさ。  
 F 4 : 大きさ，何？  
 F 3 : How big.  
 F 4 : ええと，ええと，ああ，これは（辞書を見せながら）  
 J 2 : 床？  
 F 4 : ゆかは，2ハンメートルくらい，長いです。そして wide...  
 J 2 : はば？  
 F 4 : はばは，同じだった。そして，このうちにロフトがあった。ロフトにベッドがあった。  
 J 2 : へえ。  
 F 4 : そして，家のとなりに，トイレをつくった。  
 J 2 : うんうん。  
 F 4 : これは何？（辞書を見せながら）  
 J 2 : 行為？  
 F 4 : これは，いいコウイだと思った。  
 J 2 : すごくいいと思う。私もそう思う。

ここでも，下線で示した発話部で，対話を通してのことばの獲得の動きを見ることができる。「ボランティア」「感謝される」はF 4 の言いたいことにJ 2 が寄り添うような形でことばを与え，F 4 がそれを使い始めている。「大きさ」については，J 2 の発話が理解できないF 4 に，F 3 が援助を与えている。「床」「幅」「行為」はF 4 が辞書を駆使しながら意思疎通を行おうとする中で出てきたものである。

この「3大事件」の対話活動の後，3人の参加者はそれぞれに次のような感想を述べていた。

F 3 : 「(F 4 の経験と自分の経験を比較して) ほうはメキシコに行って家をつくったことがない。(でも) アメリカで同じようなことをしてみたらいいと思う。りょうこうをすることはいいことだと思う。J 2 さんの話がおもしろかった。自分もイギリスやフランスに行きたい。りょうこうする

と新しい perspective を得ることができる。この会話をするのがよかった。よく日本語の練習をして、おもしろいはなしをききました」

〔ワークシート中の記述から。括弧は筆者の補足。下線も筆者〕

F 4 : 「J 2 さんと F 4 さんはおもしろいことを話しました。そして面白い人を見つけました。」〔ワークシート中の記述より〕

J 2 : 「3 つ話しましたが、話していくうちにだんだんと留学生の説明のしかたが上手になり、3 番目にはとても分かりやすくなりました。ただ話を聞くのではなく、沢山質問をしてきてくれたり、留学生の国ではこうだという例を教えてくれたので楽しかったです。みんな、ただ聞くという人はいなかったと思います。積極的に質問をしてくれました。文化の違いには凄く興味を持ってくれました」

〔授業後のアンケート中の記述より〕

「3 大事件」を聴き合い語り合う活動が、参加者にとって、興味深く意義のある社会文化的実践として捉えられ、それが言葉の習得においても効果があったことが実感されているとみることができるのではないだろうか。

### 3.3. 自由インタビュープロジェクトと最終発表

8 月 2 日の授業の前に、留学生には、宿題として、次のことを考えてメーリングリスト<sup>3)</sup>に流すように指示を出した。

- (1) 自由インタビュープロジェクトのテーマ（話したり考えたりしたいこと）
- (2) テーマの説明
- (3) このテーマを選んだ理由。（どうして話したり考えたりしたいか。ただ「興味があるから」だけでは不可。どうして興味があるのかよく考えて説明する。）

8 月 2 日の授業では、ボランティアにこのテーマについて留学生がそれ

---

3) 留学生、ボランティア、教師をメンバーとしたメーリングリストを開設し、授業の連絡、課題の提出、質問やコメントなどを相互に行うために活用した。

ぞれ説明をし、インタビューを行う時間を設けた。20分ずつ時間を区切り、相手を交替するようにした。授業のあとで、ワークシートに、(1)質問リスト、(2)対話（実際に話した内容）、(3)考察（対話をして感じたり考えたりしたこと）、を記入し、提出するように指示した。この第一稿を8月4日までにメーリングリストで提出してもらうようにした。

8月5日の授業では、提出してもらった第一稿に教師からのコメントを書き入れたものを各自に返却した。同時に、1～2名の学生のものを、本人の許可を得てコピーしてクラス全体に配付し、どんなところが良く書けているか、さらにどのようなことを取り入れると面白くなるか、良くなるか、といったことをクラス全体で話し合った。そのあと、留学生とボランティアで個別の対話の続きを行った。新しく話した内容を書き足して、最終版を提出してもらうようにした<sup>4)</sup>。

最終版として提出されたワークシートの例を下記に示す（インタビュー相手の名前のみイニシャルに変更。残りは原文のまま）。

テーマ：日本人のアメリカについての意見

1. テーマについての説明

私のインタビュー・プロジェクトのテーマは日本人のアメリカについての意見です。インタビューの中で私は日本人にアメリカについて自分の意見を質問をしたいです。そして、私はどうして日本人はアメリカに興味があるか分かりたいです。

4) この「自由インタビュープロジェクト」の活動の設計においては、細川（2003）・細川他（2004）の「総合活動型日本語教育」から、特に個人のオリジナルなテーマの設定、他者とのインターアクションによる思考と表現の活性化という点で多くの示唆を受けた。しかしながら、短期集中プログラムという特質、対象学生の特質に対応して、枠組みや展開方法は異なる形をとっている。



2. どうしてこのテーマについて話したり考えたりしたいか。

私はいつも日本人が外国、特にアメリカが大好きだそうです。私はどうしてアメリカが好きか分りたいです。UCLA 大学でたくさん日本人の留学生に会って、その日本人はアメリカが大好きです。だから、私は日本人のアメリカの意見に興味があります。

3. 日本人のボランティアへの質問のリスト。

1. 自分のアメリカについて意見は何ですか。どうして。(アメリカに興味がありますか。)
2. アメリカについて何を聞いたことがありますか。
3. どうして日本人がアメリカが好きだとおもっていますか。

4. 対話

〈対話1〉 ボランティア：Sさん

1. アメリカに興味がありますか。どうして。

「はい。アメリカは世界でとても有名な国ですから。。。

日本とアメリカのこうりゅうがいいですから。。。

ハリウッドの映画がすきですから、私はアメリカに興味があります。」

2. アメリカについて何を聞いたことがありますか。

「アメリカの小学校ではすごくじゅうできます。アメリカの授業でおかしを食べられるそうです。このことはいいと思います。日本の授業ではおかしを食べられません。。。

アメリカで食べ物は大きいそうです。このことあまり好きじゃありません。。。

テレビとニュースからアメリカのじょうほうはいっぱい入ってきました。たとえば、さいきん Iraq のせんそうを聞きました。」

3. どうして日本人がアメリカが好きだとおもっていますか。

「いろいろなことにおいてさいせんたんですから。」

〈対話2〉 ボランティア：Yさん

1. アメリカに興味がありますか。どうして。何を聞いたことがあるか。

「私は。。。あまりきょうみがありません。アメリカはとても大きくて、テレビからアメリカは Crisis がいっぱいだそうですから、私はアメリカがこわいと思っています。。。でも、私の友達は Washington D.C. にいて、楽しい所と言ったから、私は行きたいです。でも、まだびくびくしています。」

3. どうして日本人がアメリカが好きだとおもっていますか。

「日本は人がいっぱいだから、アメリカに行きたいです。。。。

アメリカは世界のちゅうしんですから。。。。

アメリカでいろいろなタイプの人があるから、あたらしいことについてなれます。だから、日本人はアメリカにきょうみがあるとおもっています。」

#### 5. 考察

私はボランティアと対話したあとで、いろいろなおもしろい考えをわかりました。まず、りょうほうのボランティアはアメリカは世界のちゅうしんですから、日本人がアメリカに興味があると言いました。それから、Yさんのアメリカについて意見と言った時、私はびっくりしました。ほとんどの日本人はアメリカが好きですが、Yさんはアメリカにあまりきょうみがありません。前に、ぜんぜん日本人がアメリカにびくびくしていることを聞いたことがありません。私はYさんの考えはとてもおもしろいと思いました。今、私はたくさんの日本人はアメリカアメリカに興味があるのに、違うアメリカの意見もあることが分かります。

この例では、自ら問いを立て、相手から話を引き出す努力をし、話を聞いた結果、自分が想像していなかった新たな視点を与えられ、自分の考えの枠組みが広がったことが示されている。日本人のボランティアも一人一人異なる意見を持っていることも具体的に実感されているのを見ることができる。考察を深めていくには、さらに継続した対話や検討が必要となってくるが、実際に具体的な他者とのやりとりを体験し、そこからさらに対話を進めていきたいという意欲をもつ出発点になっているといえるのではないか。

#### 4. 留学生は活動の意義をどのように捉えていたか

この一連の活動を受講生はどのように受け止めていたのだろうか。6週間のプログラム終了時にクラスでおこなった「学習の振り返り」の中で、「クラスボランティアとの交流の中で自分が学んだと思うことはどのようなことか」という問いに対して、記述されていたコメントを拾い上げ、分

類してみたところ（英語で書かれたものを筆者が翻訳したものも含む）、

【表4】のように、「語彙・表現・文法を学んだ」「話し方の技術を学んだ」「文化を学んだ」と大きく3種類のコメントが見られた。

【表4】ボランティアとの交流の中で学んだと思うこと

語彙・表現・文法に関するもの	新しい単語(4)/単語の使い方/俗語、スラング/教科書では学ばない表現/日本の若者の話し言葉/文法の使い方(3)
話し方の技術に関するもの	会話の技術(3)/話し方(3)) /しゃべること(2)/話すことが上手になった/日本人と話すことに慣れた/話をきくこと/ネイティブの話し方をどうやって理解するか/基本的なコミュニケーション/どうやって自己紹介をするか/どうやって共通点を比較するか
文化に関するもの	日本の文化(4)/学生生活について(2)/日本のトレンド(2)/食事や買い物のおすすめの場所/週末に何をするのか/日本人ボランティアがどんな漫画を読んでいるのか/携帯電話を持つといいということ/日本では小さい犬が人気があるということ/東京タワーは芝公園の近くにあるということ/夜市についてのこと/ 日本人のものの見方(perception)/アメリカ人についての日本人の意見/一般的な考え方/ より深い理解/新しい友人

## 5. 考察

ここで考えたいのは、留学生が「語彙・表現・文法を学んだ」「話し方の技術を学んだ」「文化を学んだ」と感じているのは具体的にどのようなことなのか、そしてそこにはどのような意義があるのかということである。留学生が活動後に提出したワークシートを見ると、余白に数々の単語のメモが残っている。対話をしていく中で、ボランティアが発したことばの意味が理解できなかった時に、その意味を尋ねたり、辞書を引いたり、文脈から想像して留学生同士で助け合って意味を確認したりしたものであることが想像できる。対話の中でも、参加者のやりとりの中で言葉をさがしだしていく様子が観察された。生きた文脈の中で、そこで必要とされる言葉を知り、相手の話を理解したり自分のことを表現したりするためにそれを使用していったのである。

また、「共通点さがし」にしても、「人生の3大事件」にしても、どのよ

うに共通点をさがしていくか、どのように自分にとって意義のあった経験を話すかという話し方について、はじめはボランティアの人に話しを進めてもらい、次第にそのリズムにのるような形で留学生からも問いかけをしたり、自分のことを述べ始めたりする様子も観察された。初対面の人に対して自己紹介をしながらお互いの共通点をさがしたり、人と関係を深めていく過程で自分にとって意義深かった経験を語ったりするということは、母語でもすでに幾度となく実践してきたことであろう。それを日本語で行うとき、そのような母語での体験を応用しながら、時には、直訳的なことばを使って意味が通じないことがあったり、予想外の反応が返ってきたりということもある。しかし、試行錯誤をしながら、お互いのことを理解するという社会的事実が構築され、それが、「日本語でコミュニケーションができた」という実感をもたらし、日本語を学んだ、使えるようになった、という達成感をもたらしただのではないだろうか。

バフチンは、「話すことを学ぶのは、発話の構築法を習うことなのである（なぜなら、われわれは発話によって話すわけで、個々の文や語によって話すのではないから）」と述べている。これは社会的出来事の文脈に根ざした対話の中で、ことばが体得されていくことを示しているといえよう。バフチンは、人々が何かの活動をおこなうとき、その活動に固有な言語使用が積み重ねられていくとし、その比較的安定した類型を「発話ジャンル（ことばのジャンル）」と呼んでいる。そして、人々は、このジャンル形式の鋳型の中に自分のことばを注入することを学ぶのだという（Bahtin 1975-1979／新谷訳 1988）。北岡（1998）は、バフチンのこの視点を、発話ができるようになるということは、「（発話を）ただ聞くだけでなく、自分でも再現する」という社会文化的な活動の専有の過程である」と説明している。

共通点をさがす、3大事件を話す、興味関心のあることについてインタビューをおこなうという具体的な社会的出来事の中で、留学生は、実際に使われる言葉を聞き、自分もそれを再現したり、試行錯誤しながら「通じ

る」ことばを紡いでいき、新たな社会的出来事を織り成していったのである。そして、相手が興味を持って聞いてくれたこと、そこから新たに話が発展していったこと、相手の話を聞いて自分も何らかのインパクトを受けたこと、新しい経験や価値観との接触から思考が広がったことが実態のある達成感となったといえよう。

文化に関する学びも、これと連動しておこっている。一連の活動の中で、留学生は、対話相手のボランティアの、具体的な個別の経験、日常の行動、物の見方・考え方にふれる機会を得ていた。それぞれの行動や現象について、なぜそうなのかと、背景について自ら問い、理解する体験もした。それまで「日本人」と漠然としたイメージで捉えていたものも、実は多様であることも感じることはできたのではないだろうか。

## 6. まとめと課題

以上に、「共通点をさがす」「人生の3大事件を聴き合い語り合う」「自分の知りたいことについてインタビューし考察する」といった活動が、お互いを知り合い、関係性を築き、自分の視野を広げ、新たな思考を生み出すという社会文化的実践の「社会的出来事」となり、そこに織り込まれた言語活動の中で、ことばの獲得と専有がおこっていく可能性を見てきた。しかしながらこれらの活動は、社会文化的実践の出発点に過ぎない。この先には、グループで協働で何か一つの作品をつくったり、イベントを企画して実行したり、問題解決をおこなっていく活動が考えられる。力をあわせて、互いの調整をしながら課題を達成していくことが必要になってくるだろう。

今回の実践では、文法構造に焦点をおいて学習する時間も別枠で設けており、その文法整理の時間と、活動に根ざした対話実践の時間を連携させる形をとっていた<sup>5)</sup>。活動の時間に、文法の時間で学習したことが使える

---

5) オレゴンプログラムの場合、アメリカの大学での単位換算ができることを大きなアピールポイントとしているため、シラバスにおいても、どの文法を学

からこそ意義があるのであり、文法の時間で体系的に整理がされるからこそ、活動の時間で学習者が言いたいことを効果的に表現できるようになるといえるだろう。近年、活動に根ざして文法の整理も包括的におこなっていく可能性も探究されているが（西口2004など）、重要なのは、「社会文化的実践の「活動」と「文法の整理（明示的・体系的な学習）」を別立てで行ったとしても、それをつなげる視野をもって、教師が学習を捉え、授業を設計していくということではないだろうか。

#### 参考文献

- 北岡誠司（1998）『バフチン—対話とカーニバル』講談社
- 桑野隆（2002）〔新版〕『バフチン〈対話〉そして〈解放の笑い〉』岩波書店
- 西口光一（2003）「終章 言語とコミュニケーションを再考する—バフチンとオングの言語論と第二言語教育への示唆—」岡崎洋三・西口光一・山田泉編著『人間主義の日本語教育』凡人社
- 西口光一（2004）「留学生のための日本語教育の変革：共通言語の生成による授業の創造」石黒広昭 編著『社会文化アプローチの実際』北大路書房
- 細川英雄（2002）『日本語教育は何をめざすか—言語文化活動の理論と実践』明石書店
- 細川英雄（2003）「問題発見解決学習としての総合活動型日本語教育」早稲田大学日本語教育研究センター「総合」研究会編『「総合」の考え方と方法』早稲田大学日本語研究教育センター
- 細川英雄・NPO法人「言語文化研究所」スタッフ（2004）『考えるための日本語』
- 宮崎里司・西條美紀・中山由佳（2000）「インターアクションと日本語イマージョンプログラム：99年度早稲田・オレゴン夏期日本語プログラム」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』13号、早稲田大学日本語研究教育センター
- 矢部まゆみ（2003）「「人生の3大事件」を聴く、語る—早稲田オレゴンプログラム「ワークショップ」での試み—」『講座日本語教育』第39分冊、早稲田大学日本

---

習する計画になっているかを明示する必要がある。どの教科書のどの部分を学習したかということからどの文法項目を学習したかが検討され単位換算ができるかどうかが決まるからである。その対策として現段階では、単位換算の目安として文法項目のシラバス（使用教科書）を提示して、それは最低条件として保障できる状況を整えておき、その上に活動型の授業を設置している形をとっている。

語研究教育センター

矢部まゆみ (2005) 「対話教育としての日本語教育についての考察」リテラシーズ  
研究会 編『リテラシーズ—言葉・文化・社会の日本語教育へ』第1号, くろし  
お出版

Bakhtin, M. M. (1929) 桑野隆 訳 (1989) 『マルクス主義と言語哲学 (改訳版)』未  
来社

Bakhtin, M. M. (1975-1979) 新谷敬三郎 訳 (1988) 『ことば対話テキスト ミハイ  
ル・バフチン著作集 8』新時代社

Bakhtin, M. M. (1963) 望月哲男・鈴木淳一 訳 (1995) 『ドストエフスキーの詩  
学』ちくま学芸文庫

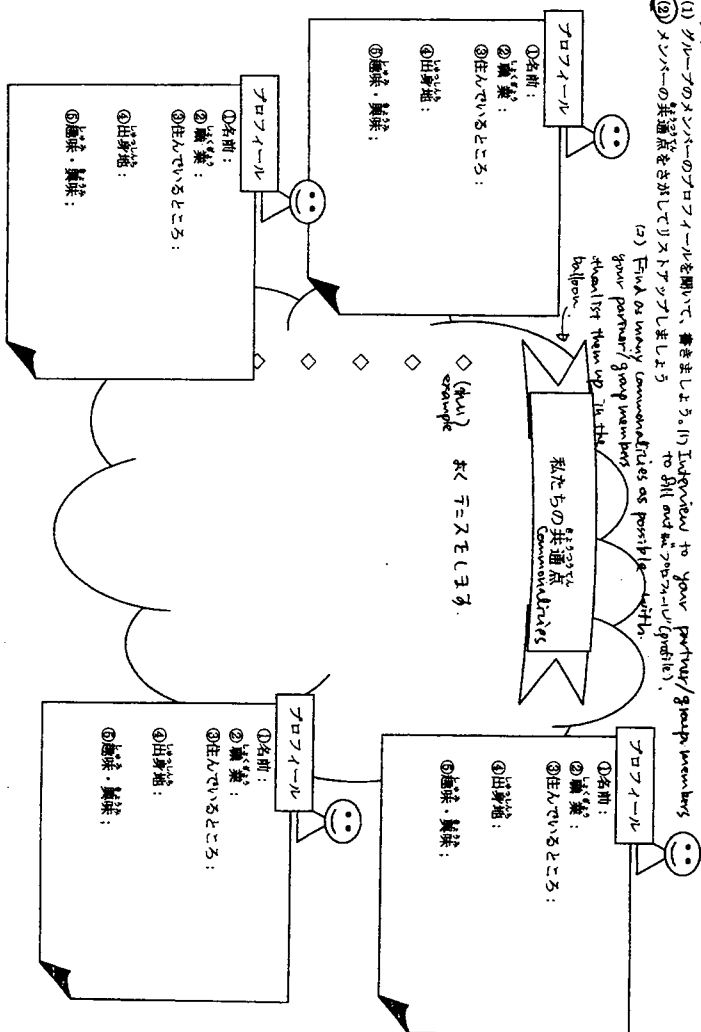
Wertsch, J. V. (1991) 田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子 訳 (2004) 『心  
の声—媒介された行為への社会文化的アプローチ』福村出版

## きょうごせんは いくつ? How many commonalities can you find?

タスク:

- (1) グループのメンバーのプロフィールを聞いて、書きましょう。(1) Interview to your partner/group members to fill out the questionnaire (profile).

(2) メンバーの共通点をさがしてリストアップしましょう  
Find as many commonalities as possible with your partner/group members. I shall list them up in the balloon.



[添付資料 1]



## 人生の3大事件を話そう。語ろう

【タスク1】グループのそれぞれの人生の3大事件について、話を聞きながら質問をして、印象的だったポイントや、教訓を聞き取ろう。

	わたし( )	_____さん	_____さん	_____さん
人生の 3大事件	1			
	2			
	3			

【タスク2】人生の3大事件を話し合った感想を書こう。

〔添付資料2〕